

「イエスの十字架」

イエスがエルサレムに入られる時、人々は熱狂的に迎え入れます。イエスを担ぎ上げれば長いトンネルからやっと抜け出せる。その喜びが人々を突き動かしていました。ところが、イエスはその期待になかなか応えてくれません。一気に膨張した熱情は一瞬にして醒め、期待は罵倒に一変します。十字架につけられたイエスを見た人々は、手のひらを返したようにイエスを罵ります(「そこを通りかかった人々は、頭を振りながらイエスをののしって、言った。『神殿を打ち倒し、三日で建てる者、神の子なら、自分を救ってみろ。そして十字架から降りて来い。』」マタイによる福音書 27:39-40)。もちろん、これまで苦い思いをしていた祭司長や律法学者もイエスを侮辱します(「同じように、祭司長たちも律法学者たちや長老たちと一緒に、イエスを侮辱して言った。『他人は救ったのに、自分は救えない。イスラエルの王だ。今すぐ十字架から降りるがいい。そうすれば、信じてやろう。神に頼っているが、神の御心ならば、今すぐ救ってもらえ。『わたしは神の子だ』』」マタイによる福音書 27:41)。そればかりではありません。同じ立場に置かれているはずの、一緒に十字架につけられている強盗までイエスを罵るのです(マタイによる福音書 27:44)。

ところが、十字架上のイエスは人々の言葉に一切反応されません。じっと一人で罵声の嵐に耐えておられます。それは何時間も続きます。そしておもむろに「イエスは大声で叫ばれた。『エリ、エリ、レマ、サバクタニ』」(マタイによる福音書 27:46)。詩編 22 編の言葉でした。確かにここだけを切り取れば、「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」という意味ですが、この詩は神の助けを求める詩であり、神の助けを喜ぶ詩でもあります。しかし、それを聞く人々には絶望の言葉としか聞こえませんでした。嘆きの詩としか受け取れませんでした。なぜなら、十字架は弱さの象徴だからです。最も愚かな罪の象徴だからです。人間を取り巻く現実はととても厳しく、救いを実感できません。そして、勝手な期待を裏切られたと思っていたからです。

彼らはまだ気づいていません。

「十字架の言葉は、滅んでいく者にとっては愚かなものですが、わたしたち救われる者には神の力です。」(コリントの信徒への手紙一 1:18)

この十字架こそが救いであることを。人間の目には愚かと思えないイエスこそ、「隅の親石」(詩編 118:22)であり、救いそのものであることを。これは、「イエスの十字架への道行きは苦難の道行きであると同時に、私たちが解放する喜びの道行きでもあるのです」との先週の言葉と呼応します。イエスの苦しみは苦しみであると同時に救いなのです。人間の思いとは関係なく、十字架は立っています。神は人間の思いとは逆転して、すでに人々を救いへと招かれているのです。

